



京の宇宙学

松本 紘 編著

ナノオプトメディア 146頁, 2,993円

読み物
お薦め度
4
☆☆☆☆★

縁あって本書を手にした。私自身が京都で生まれ育ったためか、「京」「京都」という言葉はそれだけで何とも愛着を感じる。

本書は、京都大学宇宙総合学研究ユニットに属する研究者がそれぞれの分野の研究の最前線について紹介する形で構成されている。京都大学宇宙総合学研究ユニットとは、「宇宙」をキーワードに、京都大学内のさまざまな研究部局が分野横断的に広く緩やかに結びついた研究組織（ユニット）である。本書では各著者がそれぞれの分野、それぞれの視点から宇宙を語っているのだが、そのことで、宇宙の多様性を再認識することができて面白い。

また本書は高校生を想定読者として執筆されており、単なる宇宙の啓蒙書ではなく研究の最前線をわかりやすく紹介することに重点が置かれている。本文中にもあるが、日本語では「宇宙」と一言であっても、その実は、手が届かないような「無限に広がる宇宙」（ユニバース）と人間の手が届く範囲の宇宙（スペース）からなっており、またそれぞれ、主として理学/工学分野で研究が展開されている。「宇宙」に漠然とあこがれをもっている人（特にこれから学ぼうと思っている高校生など）にとっては、その具体的なイメージをつかむことができるだろう。

付録にDVDがついているのもうれしい。宇宙で生じている現象（本書では太陽のみであるが）を動画を通して見ることで、そのダイナミックな様相を体感することができる。本書にも「小学2年の児童が大喜びした」とあったが、理屈抜きで宇宙現象のダイナミックさは純粋に「面白い」と感じられるものだ。ほかに、宇宙開発に関連し

た動画も収められている。その最前線を垣間見られるようで、これまた見ていてワクワクする。

具体的な内容についても紹介しよう。1章は小山勝二氏による、X線天文学と「京都」とのかかわりを述べている。安倍晴明をはじめおよそ1000年前に記されたさまざまな文献が、現代のX線天文学にいかに関与しているか書かれており、歴史都市ならではの悠久さを感じる。

2章は柴田一成氏による、太陽研究の最前線。ずっと歴史は浅くなるが、80年前に設立された花山天文台とそこでの太陽コロナの理論計算などを礎に現在の太陽研究が発展していること、また、「ひので」衛星など最新の観測装置で、今まさにコロナ加熱問題などの謎が解き明かされようとしていることがわかる。

後半は内容が工学系の話に移り、3章では山川宏氏により宇宙望遠鏡を打ち上げることの基礎が書かれている。人工衛星による天文観測データをオフィスにしながら入手できる現代の研究環境がいかにありがたいことであるか、望遠鏡打ち上げの難しさを通して感じた。また、序章（松本 紘氏）および4章（松本 紘氏・篠原真毅氏）では、宇宙太陽発電の話を中心に、これからの宇宙開発の話などが著者の視点から書かれている。

これらの「宇宙学」は、単に知的好奇心の充足や社会貢献にとどまらず、人類の繁栄した未来という、壮大な「明日」につながっていることが語られている。随所に筆者各々の研究への情熱を感じることができ、なかなか「アツイ」読み物になっている。

浅井 歩（国立天文台野辺山太陽電波観測所）